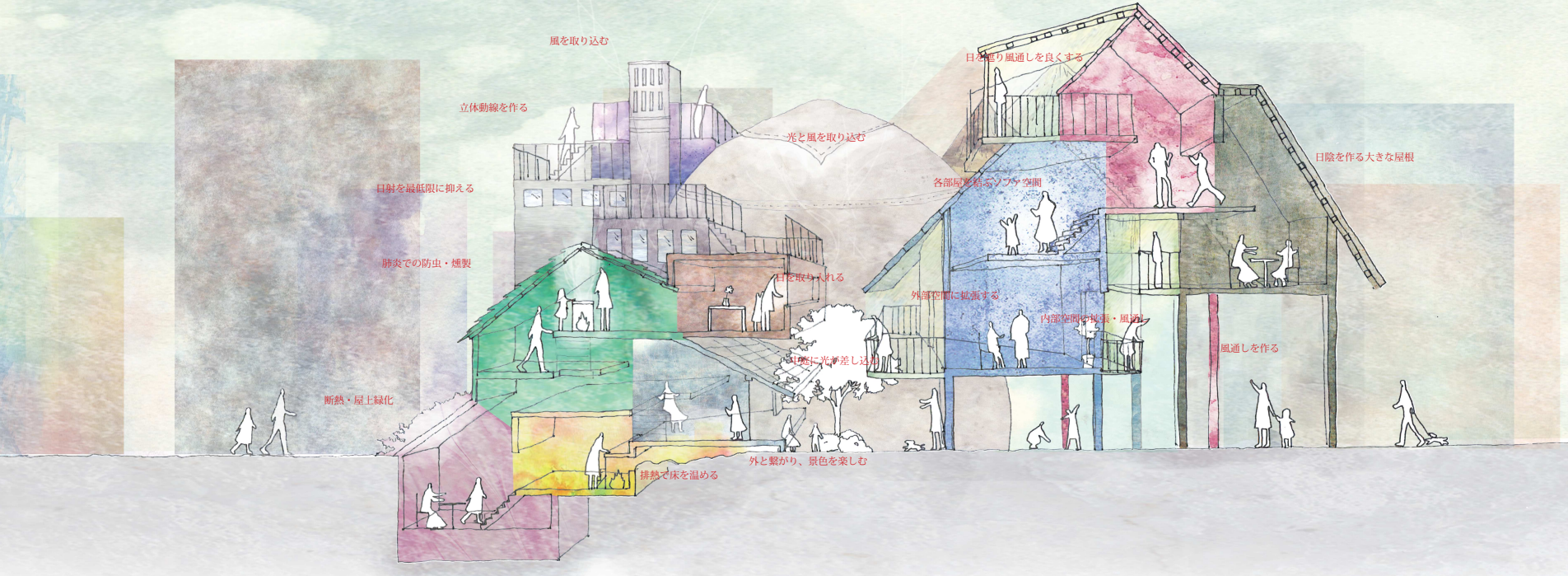
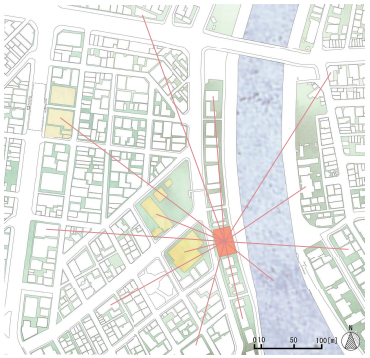
世界家産 －学びの集合体－



世界家産 THE WORLD HOUSE

■不足のない街で学べないこと



商店街や集合住宅、小学校、公園など、機能の充実したこの街では、独立した個人でも生活が成り立ってしまう。そうした街で暮らすことは人との関わりが少なく淡白なものである。

そこに街中では学べない暮らしの学びの場を挿入する。暮らしの学びとは、親から子に教える学びであったり、風を上手く取り入れる空間からの学びである。

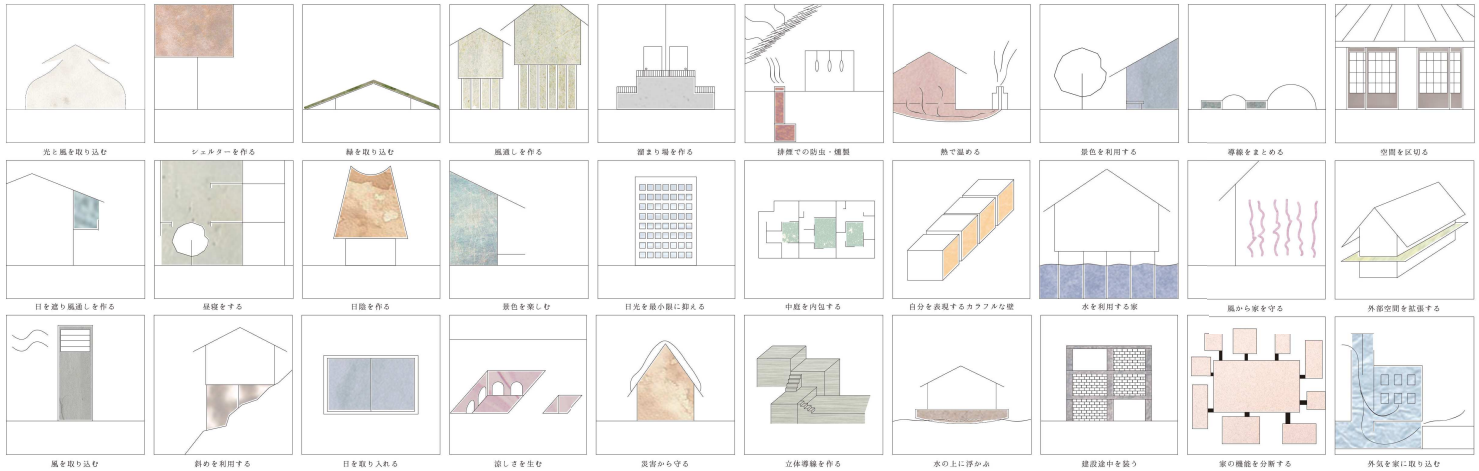
その学びが集合住宅を飛び出し、街に広まっていくことで、学びを通した交流が街に生まれる。

■多世代・多国籍が一緒に住むこと

多世代・多国籍が同居することは、今までの核家族の住居形態とは大きく異なるライフスタイルが考えられる。

例えば、多世代が住まうとき、両親が共働きの子供は放課後におばあちゃんにお出話をしてもらいながら、洋服のたたみ方を学ぶ。その学びを生かして、両親が帰って来たら洗濯物のお手伝いをする。多国籍が住まう時は、その住まい方から独自の言語や生活習慣などの文化を学び、それを学校で披露する。このように学びを通して地域と繋がり、住む人だけでなく、より多様な人とに学びが広がっていく。

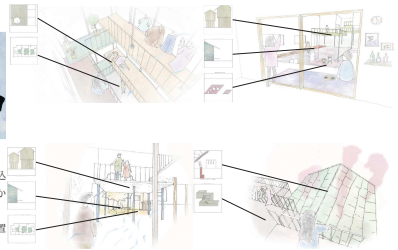
■学びのダイアグラム



■暮らしの中の学び

昔の住宅では住宅自体が学びの集合体であった。
そしてそこでの暮らしにも多くの学びがあった。しかし現在の住宅では「暮らしの中の学び」が失われている。
暮らしの中に存在する学びに気づく建築。
かつて学びの集合体であった住宅を再考する。
その際に、昔の住宅との差異は、多国籍であること・集合していることである。
様々な国の「暮らしの中の学び」が集積することで、その学びはより深まり、また新たな学びにつながる。
こうした学びを通して交流する新たなコミュニティが発生し、この集合住宅は地域の拠り所となる。

■学びのコラージュ



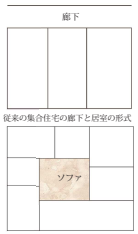
世界の伝統住宅から抽出した空間の「学び」をコラージュしていく。
空間の学びとは気候や風土から学ぶ、風や光の取り入れ快適な空間を作ったり、日射を遮ったり、逆に取り込んだりすることで温度を調節するなどの知恵である。
これらの学びの空間的な特徴をダイアグラム化し、建築空間として落とし込む。それらの配置はトルコの「ソファ」という空間形式を中心に空間特性から決定される。
例えばモンゴルのゲルの天窓は、換気と採光に寄与するため建築上部に配置され、タイの高床は川沿いのグランドレベルに配置される。

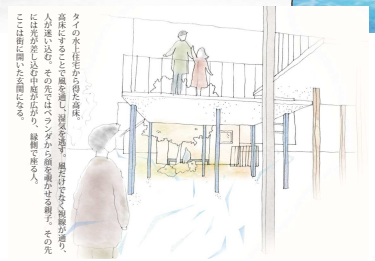
■空間構成の核となる「ソファ」

ソファとはトルコの伝統的な住宅形式に見られる特徴的な空間で、各個室をつなぐ役目を果たし、多目的な用途で利用される場である。遊牧民時代の複数のテントに囲まれた空間が起源であり、それゆえに廊下という概念がなく、各個室は必ずソファに繋がり、ソファは上下階をつなぐ役割も果たす。

このシステムを利用して空間を構成する。従来の集合住宅形式の主流であった廊下に居室が整理されて配置では、各個室以外はただの移動空間であり、留まる場が個室であるため交流が生まれにくい。しかしソファという概念を利用することで、各個室が必ず共有部と繋がり、ソファが滞留空間になることで多様な交流を促す。

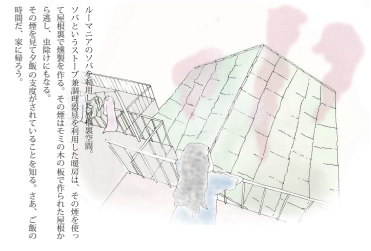
ソファには街の人も利用可能な機能が入り、居住者と街が繋がる接点にもなる。





タイの水上住宅から得た高床、産床にすることで風を通し、湿気を逃す。風だけでなく、視線が通り、人が通いやすく、その先ではベランダから眺める樹々、その先には光が差し込む中庭が広がり、緑樹で埋める人。ここは街に開いた空間になる。

モンゴルのゲルから得た天窓。ここでは天窓から降り注ぐような素朴な時間変化に合わせて動いていく。時間の移ろいを感じながら、ゆったりとした時間を過ごす場所。光だけでなく風も天窓を通して抜けていく。心地よい風を受けながら、暖かい光に包まれる。



ルーマニアのソバ。多目的に利用される空間。ソバというストーブ兼調理設備を利用した暖房は、その熱を使って屋根裏で燻製を作る。その熱はモミの木の板で作られた屋根から逃し、並陽けにもなる。その棚を見ると魚がさされていることを知る。そこから、ご飯の時間だ、家に帰ろう。